

～ ガス欠について説明しながら、私は何とも言えない戸惑いを隠さずにはいられませんでした。その男性の外見は、避けるようにと私が言い聞かされてきたタイプ だったからです。男性は、「ガソリンを持ってきてあげるよ」と言って去りましたが、彼が戻ってくるまでの 10 分間、さまざまな最悪のシナリオが私の頭をよぎりました。

戻ってきた男性は、ガソリンをタンクとキャブレターに注ぎ、車のエンジンをかけてくれました。私が手持ちの所持金 3ドルを渡そうとすると、ガソリンにかかったのは 29 セントだけだからと言って、お金を受け取ろうともしませんでした。これは 1960 年代のことです～

車 で自宅に戻った私は(自宅まで 10 分ほどのところでした)、深呼吸して、今起こったことをもう一度振り返りました。今起こったことというのは、“ボロボロ の本 ”の中に宝石を見出した体験だったのです。しかし、場合によっては危険ともなりかねない状況で、私は身の危険を案じ、よからぬ想像をしてしまったことに気づきました。

そして、さらに心の中を探ってみたとき、自分がなぜこの男性を信頼できなかったのか、その根源を知ることができました。これは私たち 一人ひとりが辿るべき心の旅だと思います。できることなら、危険な状況に直面せずに、自分の心を省みることができればよいでしょう。真に奉仕を志すなら、この内省がとても大切です。

私は米国カリフォルニア州のデュアルテ・ロータリー・クラブへの入会を勧められました。当時、女性の入 会をめぐる訴訟が行われており、男性はおろか、女性自身も女性の地位を低く見ているようなところがありました。性差別からくる不愉快な電話もあり、女性 は立派なロータリアンになれないという固定観念について改めて考えさせられました。マジアベ元RI会長が以前に指摘されたように、周囲を見渡せば、医師、教授、技師、作業員、ビジネスマンとして男性と肩を並べて活躍する女性が既然大勢いました。ロータリーの細則が初めて立案された際、そこには「高潔性 のある人 (persons)」と書かれていましたが、男性社会の影響を受けてか、後にこれは「高潔性 のある人(men)」と書き換えられました。

女 性は能力や価値がなく、男性と同じようにロータリアンとなって人道的援助を提供できない、という観念は一体どこから始まったのでしょうか。女性には男性ほ どの重要性や価値がないというのは大げさかもしれませんが、女性は重労働ができないし、そのような仕事をやりたがらないという風潮があったと思います。ま たはロータリーで

の活動に果敢に挑む男性たちはその勇ましさを女性と分かちあいたくなかったのかも
しれません。

いずれにせよ、社会は正当な理由なしに、一部の人々を除外していたのです。

職業分類の原則の下、ロータリーにはさまざまな人種、民族、信条、性別の会員が
います。最も大切な要件は、高い倫理を実践する奉仕の道に人を招き入れること
です。ロータリーの女性たちを見れば、女性も奉仕活動に大きく貢献していることがわ
かります。これまで 25 年間、女性も男性と同じように、重役会議、作業場、財務交渉
などあらゆる仕事の場面で力を発揮しています。

確かに男女の違いというものは あります。ただし、それは差別を生み出すような違い
ではありません。米国の公民権運動を指導したスーザン B.アンソニーは、「炉辺だけ
でなく、国の議会でも、男性が女性を同等の存在としてみなす日がいつの日かやって
くるでしょう。そのような日がやってきて初 めて、男女間の完全な仲間意識や理想的
な調和が見られるようになるのです。これは人類で最大の誇りとなることでしょう」

心の奥底をのぞき、自分が持つ偏見がどこから来ているのかを見つけ、どうしたらそ
れがなくなるかを考える必要があります。若い世代が心を開いて人を受け入れられる
のは、私た ちが彼らをそう育てたからです。私たち自身がそれを実践していなくても、
人類への愛という共通項の下、人種、信条、性別、年齢によって差別することのない
寛容な心を持つよう、子どもたちに教えてきました。若い世代をテーマにした最近の研
究会では、「ロータリーを元気に」というプレゼンテーションが行われま した。果たして
私たちはそれを実践しているでしょうか。

民族の多様性はいかがでしょうか。著名な人類学者、マーガレット・ミードは かつてこ
う語りました。「相反する価値観が共存し豊かな文化を形成するには、人間のありとも
あらゆる潜在性を認識する必要があります。それぞれ異なる才能を 持つ人たちが、自
分の居場所を見つけ、豊かな社会図を織り成すのです」。事実上の人種差別が存在
している国がある一方で、その問題が改善されつつある国も 数多くあります。ロータ
リーの会合はしかしながら、多様性が見られるどころか、未だ同じような人々の集まり
となっています。異なる人種や性別の人とも同じ スペースを分かちあうことに慣れた
若い世代が育つにつれ、「超我の奉仕」という共通の目標の下、異なる背景を持つ人
に対して寛容であるだけでなく、同じグ ループの仲間として迎え入れる包容力が生ま
れるでしょう。そうしてこそ「ロータリーが元気に」なるのです。 「完」